

福島県双葉海域で採集されたアミ類

渡邊昌人・藤田恒雄・五十嵐敏

Mysidacea Collected on the Futaba Coast of Fukushima
Masato Watanabe, Tsuneo Fujita, Satoshi Igarashi

ま え が き

アミ類は多くの魚類の好適な食物であり¹⁾、特に着底後のヒラメ稚魚の主餌料であることが知られている^{2,5)}。アミ類の分布密度が高い時期、水深でヒラメ人工種苗を放流することは、回収率を高める放流技術として有効である⁶⁾。当県では 1982 年からヒラメ人工種苗を放流するとともに、その放流技術を開発してきた。その結果、高い放流魚回収率が得られた理由の 1 つとして、沿岸海域にアミ類が十分に分布していたことを挙げている^{7,8)}。ヒラメ種苗放流は 1996 年から漁業者を主体とした事業となり、年間、100 万尾を超えるヒラメ人工種苗を生産し、約 100mm の平均全長で沿岸全域に放流している。このような状況にあるヒラメ栽培事業を支援するため、当県水産試験場では放流効果調査と平行して餌料環境調査を行ってきた。

本報では、1995～2000 年に実施したヒラメ稚魚餌料環境調査結果から、当県双葉海域におけるアミ類の出現と分布特性をまとめたので報告する。

材料および方法

調査は当県双葉郡浪江町請戸地先(図 1)で、1995～2000 年の 5～9 月を中心に行った。調査地先は海底が砂質であった。漁具は広田式ソリネット(幅 60cm、高さ 40cm、目合い 0.7mm、以下、ソリネット)を用いた。3 水深帯(5m、10m、15m)で行った。曳網は 5t 前後の漁船でクラッチを断続した低速(1 ノット前後)により行った。曳網距離は 1995 年が 50m、1996 年と 1997 年が 100m でそれぞれおもりのついた釣り糸で計測した。1998～2000 年は南北方向でのロラン A 2S2 の変化(±1.3)を 200m とみなして曳網距離とした。採集したサンプルは調査船上で約 10%のホルマリンで固定した後、試験場に持ち帰り、湿重量を測定した。アミ類採集個体数が少ないサンプルでは、アミ類の全数を計数した。それ以外のサンプルでは、単位重量あたりのアミ類個体数を重量全体に乗じて、アミ類個体数を算出した。同日に 2 回採集した水深帯では採集個体数を平均した値をデータとして用いた。ソリネット開口部の高さおよび漁具効率は考慮せず、ソリネットの幅および曳網距離から、1 m²あたりのアミ類個体数を算出し、アミ類密度とした。調査が複数回であった月については、水深帯ごとに平均して月別のアミ類密度とした。



図1 調査した位置